

女子大学生の育児関連意識について

江口篤寿、矢吹恭子

緒言

近年、出生率が次第に低下し、平成元年の合計特殊出生率は1.57と、史上最低になったことが発表された。

国際的にみると、低出生率の傾向は先進国共通の現象であるが、このように著しく低い出生率は、社会の高齢化に拍車をかけるだけでなく、国の人口が減少することになることから、現在、大きな社会問題となっている。

出生率低下の原因としては、女性の高学歴化や晩婚化、職場への積極的進出、未婚率の増加、それに住宅事情とか、子どもの教育費の高騰等が考えられる。更に、結婚適齢期にある女性の意識も、出生率の動向に大きなかかわりがあると思われる。

そこで、この問題を考えるにあたっての資料とすべく、近い将来、母親になることが期待される女子大学生の育児関連の意識に関する調査を実施した。

対象および方法

本学（大学・短期大学）の生活学科、被服学科各3年生、生活コース、被服コース各2年生で育児学を履修する学生を対象に、平成2年4月、育児学の最初の授業時に、集団面接法で調査を実施し、378名の有効回答を得た。

調査内容は、将来、子どもは何人ほしいか、その男女構成、自分自身の同胞の数とその男女構成、子育ては楽しいと思うかどうか、女に生まれてよかったと思うかどうか、思わない場合はその理由等である。

結果

子どもは何人ほしいか（希望児数）の質問に対して、1人もほしくないと答えた者が13名

(3.4%)、1人(3.7%)、2人(56.3%)、3人(33.9%)、4人以上(2.6%)となっており、平均希望児数は2.29人となった。

調査対象の同胞数と希望児数との関係は、表1に示すとおりで、同胞3人のものの希望児数2.37人でもっとも多く、ついで同胞4人が2.29人、2人が2.28人となっていた。しかし、同胞数と希望児数との間には明確な関係はみられなかった。

〔表1〕同胞数と希望児数

		希 望 児 数					計
		0	1	2	3	4	
同 胞 数	1	3 (10.7)	0 (0)	17 (60.7)	7 (25.0)	1 (3.6)	28 (7.4)
	2	6 (2.9)	6 (2.9)	126 (60.3)	66 (31.6)	5 (2.3)	209 (55.3)
	3	3 (2.7)	6 (5.3)	54 (47.8)	46 (40.7)	4 (3.5)	113 (29.9)
	4	0 (0)	1 (4.8)	13 (61.9)	7 (33.3)	0 (0)	21 (5.6)
	5	1 (16.7)	1 (16.7)	3 (50.0)	1 (16.7)	0 (0)	6 (1.6)
	6	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (100)	0 (0)	1 (0.3)
	計	13 (3.4)	14 (3.7)	213 (56.3)	128 (33.9)	10 (2.6)	378 (100)

かっこ内は%

子育ては楽しいと思うかどうかとの問いに対して、楽しいと思うと答えた者が303名(80.2%)、楽しいと思わないと答えた者が75名(19.8%)であった。そして、楽しいと思うと答えた者の平均希望児数は2.35人であるのに対して、楽しいとは思わないと答えた者の平均希望児数は2.04人である。しかし、両群の間に統計学的に有意差はない。

女に生まれてよかったと思うかどうかの質問に対して、よかったと思うと答えた者、すなわち、自己の性を受容する者が345名(91.3%)であった。

性を受容と平均希望児数との関係を見ると、性を受容している者の平均希望児数は2.31人であるのに対して、受容していない者のそれは2.06人であるが、この両群の間に、統計的に有意差はない。

そして、育児を楽しみ、女に生まれてよかったと思う者285名の平均希望児数は2.35人であるのに対して、育児は楽しいと思わないし、女に生まれてよかったと思わない(自己の性を受容しない)者の平均希望児数は1.87人であり、この両群の間で平均希望児数には5%水準で有意差がみられた。

なお、自己の性を受容しない者33名に対して、その理由を表2に示す6項目の選択肢から複数選ばせた結果、過半数の者が、「月経がわずらわしいから」と「妊娠や育児の負担が大きいから」と答えている。

〔表2〕性を受容しない理由

①社会で男子と女子の扱いが平等でないから	—10名 (30.3%)
②家庭で女らしさを強要されるから	—11名 (33.3%)
③筋力、腕力等が女は男よりも弱いから	—12名 (36.4%)
④月経がわずらわしいから	—19名 (57.6%)
⑤妊娠や育児の負担が大きいから	—17名 (51.5%)
⑥その他	—10名 (30.3%)

考 察

(1) 希望児数

厚生省は1988年に、出産後6か月たった夫婦約4千人を対象に、希望児数の調査を行っているが¹⁾、その結果をみると、希望児数1人は2.4%、2人は45.7%、3人は46.7%、4人以上は5.0%、平均2.55人となっており、この厚生省調査よりも本調査の方が少産志向が強いことがうかがわれる。ただし、厚生省調査は、すでに1児を出産した者を対象としていることから、1人もほしくないという者が含まれている本調査との単純な比較は無理といえよう。そこで、本調査で1人もほしくないと答えた者13名を除いた365名の平均希望児数を算出してみると、2.36人となり、やはり、厚生省調査よりも少産志向であることは否定できない。

この結果を、本調査の対象が大学生であることの特性、つまり、高学歴者は少産志向であることを示すとみるべきか、それとも、本調査の対象は厚生省調査の対象よりも若い世代であることから、若い世代は前の世代よりも一層、少産志向が強いとみるべきかについて、検討することが必要と思われる。

(2) 子育てに関する意識

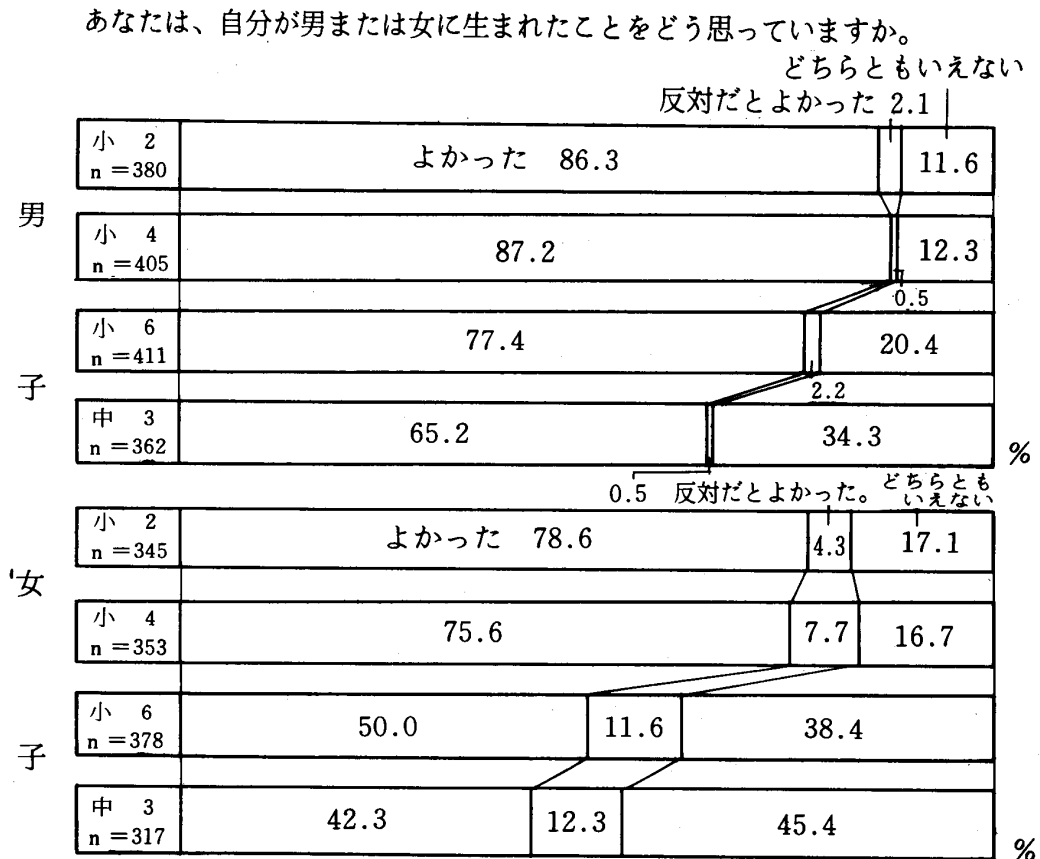
子育てに関する意識について総理府が行った国際比較調査によると²⁾、子育ては楽しいと答えた者が、日本19.8%、韓国18.9%、米国49.8%、英国70.9%、西ドイツ49.9%、フランス38.7%となっており、日本および韓国は欧米諸国にくらべて著しく低いことが、本調査は総理府の国際比較調査で最も高い値の英国よりも高い値となっていることは、興味あることであるが、育児学履修学生は育児に関心があり、育児を楽しんでいる者が多いことを示すと考えるべきであろうか。検討を要すると思われる。

(3) 子育てに関する意識と希望児数

これまでに、子育て意識と希望児数とのかかわりに関する調査研究は見当たらないが、子育てを楽しみと思う者は、そう思わない者よりも、平均希望児数が多いのではないかと予想していた。しかし、本調査では両群の間に、統計的に有意差がみられなかった。これについては、更に調査を重ねることが必要と思われる。

(4) 性の受容について

男性は男に生まれてよかったと思うかどうか、また、女性は女に生まれてよかったと思うかどうか、すなわち、男女それぞれ、自己の性を受容するか否かについての調査は割合に行われており、³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾齊藤の調査³⁾(図1)に示すように、一般的な傾向として、小学校低学年では男性は80~90%、女性は70~80%は自己の性を受容しているが、学年が進むにつれて、受容する者の率は次第に低下し、とくに中学校3年生の女性では、自己の性を受容する者が半数となっている。高校生については、著者が行った調査では⁶⁾、女子高校生で自己の性を受容している者が73%で、非常に高い率を示したことに驚いた次第である。そして、大学生につ



(齊藤麗子論文一文献3—より引用)

いては、男子が70%程度、女子が50%というのが一般的な傾向であるが⁵⁾、本調査で、自己の性を受容している者の率が90%以上であることは注目すべきことである。高村らの調査研究⁵⁾の対象は男女共学の大学生で、男子71.8%、女子51.3%となっているのに対して、本調査は女子のみの大学であることをも考慮し、かつ、家政学専攻の学生であることをも考慮し、更に検討することが必要と思われる。

(5) 性受容と希望児数とのかかわり

性受容と希望児数とのかかわりに関する調査研究は見当たらないが、女性が自己の性を受容することは、妊娠、分娩という女性のみのもつ役割を肯定しているものと思われ、自己の性を受容する者とそうでない者との間で、希望児数に差があるのではないかと思われた。しかし、本調査では、統計学的に有意差はみられなかったため、更に調査を重ねることが必要と思われる。

(6) 子育て意識、性受容と希望児数とのかかわり

これまでに(4)(5)で述べたとおり、子育て意識および性受容と希望児数とのかかわりに関する調査研究は見当たらないが、子育てが楽しいと思ひ、自己の性を受容する者は、そうでない者よりも、平均希望児数が多いのではないかと予想して、調査を実施した。その結果は予想のとおりで、この両群の間に、5%水準で有意差がみられたが、これを普遍化出来るか否かについては、更に調査を重ねることが必要と思われる。

(7) 性を受容しない者の受容しない理由

本調査では、自己の性を受容しない者の頻度が極めて低かったが、受容しない理由については、表4に示すように、著者が高校生を対象として行った調査結果と、類似の結果が得られたことは、興味あることである。ただし、高校生を対象に行った結果と著しく異なっている点は、「妊娠や育児の負担が大きいから」と答えた者が、本調査では51.5%であるのに対し

〔表3〕性を受容しない理由（高校生調査との比較）

	高校生調査 N 178	本調査 N 33
①社会で男女不平等	64 (36.6%)	10 (30.3%)
②家庭で女らしさ強要	56 (31.5%)	11 (33.3%)
③筋力・腕力等が弱い	50 (28.1%)	12 (36.4%)
④月経がわずらわしい	98 (55.1%)	19 (57.6%)
⑤妊娠・育児の負担大	59 (33.1%)	17 (51.5%)
⑥その他	35 (19.7%)	10 (30.3%)

*

* $P < 0.025$

て、高校生対象の調査では33.1%であることである。これは、大学生の方が、妊娠や育児の実態を高校生よりも多く見聞き、より身近かなことと意識しているためかと思われるが、これも更に検討することが必要と思われる。

結 語

出生率が著しく低下している現在、これに対する対策への資料を得ることを目的として、女子大学生の育児関連の意識に関する調査を行った結果、少産化への歯止めをかける対策について、下記のようなことが示唆された。

1. 自分自身の同胞の数と希望児数との間には、あまり明確な関係はみられないようである。
2. 育児は楽しいと思うと答え、かつ、女に生まれてよかったと思う、つまり、自己の性を受容する者の方が、そうでない者よりも平均希望児数が多いことから、①育児が楽しいと思われるような社会の体制をつくるとともに、育児に関する教育のあり方を検討すること、および、②自己の性を受容できるような教育と文化を確立することが必要と思われる。

文 献

- 1) 厚生省：昭和63年度人口動態調査報告
- 2) 内藤寿七郎：最新育児学（第3版）1990、同文書院p. 22
- 3) 斉藤麗子：小中学生の性に関する意識調査、思春期学6：27、1988
- 4) 東京都幼稚園・小・中・高等学校性教育研究会連絡協議会：現代っ子の性、東京都小中高校生の性意識、性行動に関する調査報告、教育開発研究所 1984
- 5) 高村寿子他：大学生における性役割の意識調査、思春期学5：542、1987
- 6) 江口篤寿他：月経処置の失敗と性自認等とのかかわり、第7回日本思春期学会講演集、1989

本研究の要旨は、第37回日本小児保健学会（平成2年10月5日、東京）において発表した。

江 口 篤 寿（本学教授）

矢 吹 恭 子（本学助手補）